平成二十七年八月十日発行
皇學館論叢第四十八巻第四号　抜刷

井上靖「楼蘭」における宿命観

―〈白い河床〉の象徴性について―

劉　淙　淙

皇學館論叢　第四十八巻第四号
平成二十七年八月十日

論文

井上靖「楼蘭」における宿命観
―〈白い河床〉の象徴性について―

劉　淙　淙

□ 要　旨

井上靖の西域小説の系列の中で、特に「楼蘭」（昭和三三年）は大変重要な地位を占めている。作中にしばしば使われる「悲運」「運命」「宿命的」「宿命」のような言葉は作品の基盤をなし、主題に通じる。論者は、作品に描かれる〈白い河床〉の原型は西域におけるアルカリ性の土地ではないかと推測する。また、先行の研究を検証しながら、詩「猟銃」「漆胡樽」（詩集『北国』所収、昭和三三年）と小説「楼蘭」とを比較する。作品「楼蘭」に見える〈白い河床〉には楼蘭という国家の歴史に刻まれた廃墟のイメージが象徴されているように思われる。特に、本稿では、「楼蘭」における〈白い河床〉の象徴性について論じる。

□ キーワード

井上靖　楼蘭　ロブ湖　宿命観　白い河床

はじめに

「楼蘭」（『文芸春秋』昭和三三年七月）は井上靖が西域を題材にした最初の小説である。後、昭和三四年「敦煌」と共に毎日芸術大賞を受賞した。作品はスウェーデンの冒険家スウェン・ヘディン博士が書いた『彷徨へる湖』（ロブ・ノール）からヒントを得て、『漢書』『史記』『大唐西域記』などの資料に基づいて創作したものである。大国の漢と匈奴との間にはさまれた弱小国楼蘭は、曾てのシルクロードの東西交通の要衝であった。紀元前七七年に、楼蘭国民は匈奴の劫掠から逃れるために住み慣れたロブ湖畔の城邑から新しい都城（扜泥城）に移り、漢の庇護下に入った。新しい国家は鄯善と呼ばれたが、四～五世紀頃、ロブ湖も楼蘭も鄯善も砂漠の中に埋もれてしまった。

井上靖の「闘牛」（『文學界』昭和二四年一二月）は昭和二五年、第二二回芥川賞を受賞し、文壇的デビュー作となった。おもしろいのは受賞外れの「猟銃」（『文學界』同年一〇月。第二二回芥川賞候補）の中に出た〈白い河床〉という言葉が、長谷川泉氏を初め数多くの学者達に井上靖の生涯の心象風景と言われたことである。小説「猟銃」の冒頭部分で、「そんな時きまって私の瞼の中で、猟人の背景をなすものは、初冬の天城の冷たい背景ではなく、どこか落莫とした白い河床であった」という。それに、小説の終わりで、「私は両手を窓枠におくと、なぜともなく、そこが三杉の所謂彼の「白い河床」ででもあるかのように、暫く、窓の下の樹立の茂っている狭い中庭の闇を覗き込んでいた」とある。

長谷川泉氏は、井上靖が歴史を眺める心象の原点は「落莫たる白い河床」[注1]であるという。福田宏年氏も〈白い河床〉に注目し、次のように述べている。

近代的意識で言うニヒリズムともちがう。また仏教的な無常観ともちがう。人生に対する、単に退嬰的な諦念ともまたちがう。それらすべてとかかわり合う、一種の深く沈潜した運命観とも言ったらいいであろうか。この「白い河床」が、井上靖文学のポエジーを支える核であり、これが次第に発展して、『ある偽作家の生涯』『澄賢房覚書』、さらに歴史小説の『楼蘭』や『敦煌』の世界に広がって行くのである[注2]

右の文中の「一種の深く沈潜した運命観」について、福田宏年氏はここでは詳しく説明していない。

また、小川和祐氏は詩の角度から〈白い河床〉を見る。「運命（さだめ）？　さなり、あゝ　われら自ら孤寂（こせき）なる発光体なり！　白き外部世界なり」――伊東静雄の「八月の石にすがりて」という、この詩から井上靖は、「苛烈な夢と孤独に堪えて生きた精神」に「深い衝撃」を受けて、そこに、なにものかの「文学精神」を発見した。つまり、小川和祐氏は「八月の石にすがりて」は、〈白い河床〉の雛形となったという[注3]。もともと、井上文学の基幹には、室生犀星、萩原朔太郎、三好達治らの影響を受けて詩作を始めたという大岡信氏[注4]らの論文がある。

本論では、井上靖の散文詩、紀行文などを含めて、西域小説「楼蘭」における〈白い河床〉の象徴性を考察してみる。

一　「楼蘭」における宿命観（引用文の傍線は筆者。以下同じ）

作中の「悲運」「運命」「宿命的」「宿命」のような言葉はストーリーを支え、主題に通じる。以下、作品を四つの部分に分けてその因果関係を考察してみる。

〈1〉悲運

西暦紀元前七七年秋、故王安帰は殺され、その弟で新しい王となった尉屠耆を迎えた群衆の中で、少年と老婆は「河竜を売るな」「楼蘭を離れることは、死を意味する」と叫んだ。楼蘭国の民意は二人の声に代表される。漢の管轄範囲と楼蘭の距離のため、尉屠耆は楼蘭の名が鄯善に変わり、扜泥（うでい）城へ遷都することにした。だが、楼蘭から離れる前、安帰の未亡人は服毒し自殺した。彼女の自殺の理由については、さまざまの議論がある。ここで、その自殺の原因としての「悲運」という言葉が初めて出た。

ある者は故王の悲運に対する悲歎の余りであると言い、ある者は故王の墓場のあるこの楼蘭の地を離れることの悲しさのためだと言った。不思議に彼女の死は国人のだれでも素直に受け取られた。（第二章）

「素直に受け取られた」――即ち、皆は王女の死ぬことが十分理解できるのである。従って彼女と同じ気持ちを持ち、国民は同じ順良な態度を取りながら、故国を捨て去った。新王（尉屠耆）は王族と重臣を集めて会議を行なった。結局、暫く漢の命令に服し、楼蘭の城邑を捨てて、南方に新しい国を作って、漢の保護のもとに国力を充実してから、機会を伺ってもう一度楼蘭へ帰るという決定が出た。

〈2〉運命

作品の第三章で、遷都した鄯善の国民は昔の先祖達の生活や、楼蘭やロブ湖の名を口と耳にしない日はなかった。

（ロブ湖が。筆者注）塩を含んだ水や、塩を含んだ砂というものでさえ想像もできない。にも拘らず、ただ自分

井上靖「楼蘭」における宿命観（劉）

たちがいつかはそこへ戻り、そこの美しい城邑で生活しなければならないということだけは知っていた。彼等はそれが自分たちの種族の持つ神に依って定められた運命でもあるかのように固く思い込まされていた。（第三章）

長時間にわたって鄯善人は、匈奴の殺掠に甘んじていたのである。数百年後、鄯善で育った少年達は故郷がいかなるところかは全く知らなかったが、百名ほどの男たちの一団が、ほぼ人数と同数の駱駝を連れて、楼蘭へ出発した。また、鄯善王は二千の国兵を率いて故地を奪還しようとしたが、惨澹たる敗北に終った。

〈3〉宿命的

明帝永平一六年（西歴七三年）、漢の武将・班超達は鄯善に派遣された際、部下たちを率い、風上から火を放ち、北匈奴使節の宿営地へ夜襲をかけた。翌朝班超は鄯善王を招き、匈奴使節の首を見せた。鄯善王の広は驚愕し、この蠻勇に恐怖して、即刻に漢に降服した。

永平一八年（西歴七五年）に匈奴は二万の大軍を率いて、西域奪還の挙に出て来た。ここに於いて漢と匈奴の間には、これから班超の一生をかけた長い宿命的な闘争が繰り展げられることになったのであった。（第四章）

漢の明帝が崩御すると、西域諸国が一斉蜂起した。北匈奴単于は二万大軍を率いて車師（新疆ウイグル自治区トルファン）を侵攻した。これに乗じて焉耆国（新疆ウイグル自治区バインゴリン・モンゴル）は漢に叛いて、漢の勢力を摧破することを企てた。やがて、章帝も一時西域経営を中止して、班超を召還した。これから、新たに皇帝となった三代皇帝は西域を抛棄しょうとした。折角の功業を一旦は廃棄せなければならぬ、班超の一生の悪戦苦闘も無に帰した

のである。

〈4〉宿命

最後の結果としての「宿命」という表現は、同じ第四章にある。永元一四年（西暦一〇二年）に半生を費やして西域で兵馬倥偬の生活を過ごして老いた班超は、やっと洛陽に帰った。漢の安帝は、「西域の道遠く且は険阻であること、胡族の叛服常ならぬこと、西域派遣軍の費用莫大なること」この三つの理由に依って、永初元年（西暦一〇七年）に西域を放棄した。

> 鄯善国は匈奴の間にあって、常に匈奴に劫掠され、漢が西域にはいって来ると、いつもいち早く漢を頼った。併し、やがてまたそれは漢に裏切られる結果にならざるを得なかった。鄯善国の持つ宿命として、こうしたことが、今まで繰り替えされたように、またそれからも繰り替えされて行った。（第四章）

楼蘭という国の地理環境は「楼蘭から道を南にとると、且末、于闐、莎車、疏勒の国々があって、月氏に通じ、道を北にとると、姑師、焉耆、輪台、亀茲の国々を経て、烏孫、大宛の国々に至る。従って、楼蘭は南道を取るにしても、北道を取るにしても、中国から西域諸国に行くには、どうしても、通過しなければならぬ道にあ」り、極めて重要な軍事的、政治的な意味があった。

漢の勢威は何百年間、何回目かに西域諸国に及んだ。しかし、時代が変わると漢の支配者の思考によって、西域経営への情熱が冷めると、その代わりに、匈奴が大挙に侵略して来るのである。故に小説中の楼蘭王は、漢と匈奴の間の板挟みとなる立場に位置づけられて、「小国は大国の間にあり、両属せねば安んずることは出来ない」と言った。

第二章で、楼蘭の少年と老婆は「河竜を売るな」、「楼蘭を離れることは、死を意味する」と叫んだが、典拠『史記』や『漢書』などには、楼蘭に関する記録はごく僅かな部分しか記載されていないので、明らかに、この台詞は井上靖自身の想像で作られたものである。

このように、「悲運」「運命」「宿命的」「宿命」という言葉に支えられて、作品「楼蘭」は国の特色としての悲劇を構築していると言う。

二「楼蘭」における〈白い河床〉

「楼蘭」の第二章で、楼蘭人はやむを得ず故国を離れる前に、集団でロブ湖畔やタリムとその支流や、蘆の沢や「白い河床の露出している乾河道」や、水に関係のある場所で、何回か祭壇を設け、ロブ湖の神・河竜に祈りを捧げた。彼らは、何回かロブ湖を見ても名残は尽きない。

それに、小説最終章で楼蘭の荒涼たる光景を描いている。「白く乾いた砂の道」が帯のように拡がっているだけで、どこにも湖を見ることはできなかった」という表現が出てきた。ロブ湖は中国新疆ウイグル自治区、タリム盆地東部の塩湖。タリム川などの流路や砂丘の変化で位置や形が変わり、現在は水がない。北東に楼蘭の遺跡がある。かつての青い海のようなロブ湖は姿を消し、楼蘭は全く砂漠のただ中に埋まってしまったのであった。

同じロブ湖の涸れた塩水の痕跡が分かれて、「白く乾いた砂の道」とは〈白い河床〉の変形ではないかと考えられている。ここでの〈白い河床〉や「白く乾いた砂の道」は、文明の跡、生命の跡を象徴するだろう。ロブ湖は一滴の水もなく乾いた白いアルカリを含んだ土壌になった。白いアルカリ性の土壌は、西域によくある普通の乾いた風景で

ある。これこそが、若い頃から作家の心に強く印象を与えた心象風景と思われる。

新装版「楼蘭」のあとがきの中に、次のようにある。

この作品を発表してから、いつか二十七年という歳月が経過しているが、中国の招きによって、今年の九月、ヘディン、わが大谷探検隊以来の最初の外国人として、楼蘭の故地に立たせて貰うことになっている。空々漠々たる沙の拡がりの上に立つだけのことであるが、そこで大きい天の拡がりを仰いで来たいと思っている。私の『楼蘭』は、その時本当の意味で完成すると言っていいかもしれない。(注5)

井上靖が楼蘭の跡に立ったあの時、やはり眼にしたのは天地の間に「空々漠々」の沙の上にある限りない大空であった。川は人類文明の揺籃である。黄河文明、インド文明、メソポタミア文明などは、いずれも川のほとりで発生し、発展してきた。しかし、いつか川は涸れてしまう。すべての生命と文明は川の河床と両側から消えてしまった。すべての躍動していたものは無に帰してしまう。涸れた白い河床は生命文明の墓場となってしまうのである。これは、すべてのものが繁栄していた文明の宿命なのかと、作者は枯れた川のほとりに立って蒼天に問う。

作品成立当時の昭和三三年、ロブ湖はすでに涸れつつあり、小さくなってしまっていた。小説「楼蘭」の第二章で、「風が吹き荒れたためもあったが、築地は崩れ、路地には灰のような砂が積もった。そして城邑全体が廃墟の相を帯びて色褪せて見えた」楼蘭の人々は、故郷から離れる代わりに、国を漢の軍事要塞とした。無論、この行為は「河竜」を売ったことと等しい。全作品から見れば、ここで人類と大自然の調和が崩れ始めたと考えられる。タリム河の水資源は、無残に乱用されていたか、あるいは上流でダムを造ったことが原因か、一九七〇年代になると、ロブ湖は完全

に涸れてしまったのである。

「楼蘭」の第四章で、楼蘭を取り戻そうとしている鄯善の若者達は、砂に埋められた楼蘭国で、昼となく、夜となく三日三晩の間「砂塵で天地は暗くなり、視界は全く利かない」環境下で、正体不明の侵入者と戦い、「何百という馬のいななきと駱駝の悲痛な叫び」が起り、人間も城壁さえもが「砂のために半分の高さになった」という大自然の恐怖(こわ)さを味わった。夜になると、風の怒号の中に「ロブ湖の怒った波の叫び」さえもが耳に入った。彼等はこの天地晦冥の惨状が起こった原因はロブ湖の神・「河竜は怒っている」と考えている。そして、五分の一の生き残りの人々は今度の体験が「沙漠の魔物の仕業」だと思い込んでいる。

ここで、ロブ湖の河竜、即ち絶対的な自然の力が人間の愚行に怒っていると考えられる。「楼蘭」における自然の力とは、塩分の濃い湖が持っている力でもある。この力の源は、楼蘭の人々の神でもある河竜に象徴されているのだ。

篠田一士氏と辻邦夫氏との対談の中で、井上靖は「川だけは丹念にみえています。川が好きなんです」と言った。また、「史実によって間違いなく書こうなんていうこととはまるで違って、自分の持っている川をつかみだそうとする」(注6)と言い、続けて、彼はヘルマンド川のアフガニスタン南部の流域に一番廃墟が多いことに言及している。

ヘルマンド川はずっと南のマルゴ沙漠を流れる。酷い砂嵐が原因で度々流れを変えるため、数多くの町や村が無人になり、廃墟と化してしまった。ヘルマンド付近の遺跡は戦争で壊されたものではなく、ただ、水即ち生命の源から離れたために、楼蘭のように砂嵐によって埋められたのである。

〈白い河床〉のイメージは、一面に「川」、一面に「道」であった。それは、ほとんど同義的に使用されている。これは守屋ひかる氏の指摘である。また、同氏は、井上靖の小説「傍観者」(『小説新潮』昭和二六年五月号)においては、主人公の心象は「一滴の水もない磧といった方がいい」のであると述べている。

また、「川」ではなく、「水の涸れた河の道」の「道」は「一筋の磧」とほぼ同義でつかわれている。更に、守屋ひかる氏は、井上靖の作品に「今まで荒涼とした磧を歩き続けて来た速水」（「黯い潮」『文藝春秋』昭和二五年七月号～一〇月号）、「磧のような殺風景な荒れた白さ」（「山の湖」『女性改造』昭和二六年四月号～六月号）などの例を挙げる。このような「磧」のイメージは、その他の初期作品の中にも出ると述べている。例えば、「猟銃」（前出）、そして「傍観者」（前出）「黯い潮」（前出）の登場人物の共通点は、死者に対する哀傷の念を持っているということもある。同氏は「山の湖」は、過去の体験を現在まで引きずり、その主人公の虚しさが、「磧」即ち〈白い河床〉によって表現されていると述べている。守屋ひかる氏は『静岡大正風土記』『新狩野川紀行』『狩野川 ― その風土と文化 ―』などの資料を調査しながら、井上靖が育てられた伊豆当地の狩野川には嘗て周期的に乾いた記録がないという結論を導いている。要するに〈白い河床〉の原型は直接に狩野川だと考えるのは難しい。守屋ひかる氏は、〈白い河床〉は「磧」の変形であり、また、〝賽の川原〟という民間信仰からの連想であり、「死」に対しての意識が非常に大きいと主張しているのである。(注7)

青いロブ湖は、楼蘭の生活の保障である。民は「農耕と遊牧と、ロブ湖に依る採塩と漁業とで生活していた」のであり、「楼蘭人にとってロブ湖は神であり、祖先であり、自分たちの生活そのものであった」。ロブ湖の変遷のため、楼蘭は、沙漠に埋もれて滅んでしまった。そして、沙漠の中で幾千年かの間眠り続けた。それ故に、ミイラが残り、仏塔が残り、木簡が残り、様々な文物が残った。井上靖は、西域の廃墟に踏み込み、文明の過去を悼んでいる。

〈白い河床〉は、「楼蘭」の第二章で、楼蘭の国民が、故国を離れる前に河竜を祭っている場所として使われた。ここで、もう一つ無視してはいけない詩は「決別」（『乾河道』に収録）である。井上靖が「大アルカリ地帯」で目にしたのは、見渡す限り「燁割れた白土地帯が拡がっている」風景である。彼はジープから降りる時に「そこは生きてい

る者が足を踏み入れられるところではなかった」と気づいた。

私見では〈白い河床〉が井上靖の内的な風景であり、その原型は日本の河ではなく、中国西域のアルカリ性の土地であろうかと思われる。前出の守屋ひかる氏の見方のように、つまり〈白い河床〉とは、生き物の立ち入ることのできない場所、静寂な死者の世界、異界を象徴するものと思われる。

井上靖は「シルクロードへの夢」[注8]の中に、歴史の背景について、次のように語った。

いつも歴史の背景において、そこの特殊な自然が考えられているからである。時代は変り、世は変っても、依然としてそこの自然は、砂漠も、オアシスも、草原も、昔ながらの姿を持っており、変る方は歴史の方である。そこの自然の中には往時の人間の営みの欠片が人骨のように散らばっているのである。

「楼蘭」の中でも、井上靖は生命の脆弱さを、涸れた〈白い河床〉に喩えたとも言えるだろう。本来、人類の文明は壮観な大河のように滔滔と流れている。しかし、苛烈な自然の暴威と残酷な戦争の野蛮は文明を滅ぼしている。二千年前から、キャラバンが往来し、東西の文明が交流しあって融合していたシルクロードは、荒涼たる白い涸れた河床になってしまったのである。

また、井上靖は「二十四の小石」[注9]に自分が小説を創作する経験を語った。昭和三三、三四年頃、西域小説を書く時の情況を次のように書いている。

西域を舞台にした小説に最も熱を入れていた時期である。私の作家生活の中で、精神的にも、肉体的にも、一番

張りのあった時期と言ってもいいかも知れない。『楼蘭』を脱稿した日のことも、『洪水』を書き上げた日のことも忘れないでいる。

この時期に成立した「楼蘭」と「洪水」――この一気呵成になった二作の創作からみれば、彼は西域小説を創作することに夢中になっていることが分る。「洪水」の主人公索勘は楼蘭近くのクム河畔で屯田する。クム河がロブ湖の上流という関係は、作中に関連する歴史的事件、更に、小説の舞台や成立時期など、いずれも「楼蘭」と「洪水」は共通性を持っているのである。(注10)

だが、作家自身は当時、「短編「洪水」などは、全て沙漠というものを知らなかったために書くことができた作品のような気がしている」(注11)と言い、「小説の舞台になっている所は、「自分の足で立つことができず、書物の知識で書くほかなかった」(注12)と言っている。つまり、当時の井上靖は、作品の舞台に入って取材をしていなかったことが分る。しかしながら、山本健吉氏は「楼蘭」は井上靖の「一篇の詩篇として結晶」し「西域に寄せる夢の中核部分」(注13)に入り込んだ作品であると評した。井上靖はエッセイ「西域の山河」(注14)の中に、次のように書いている。

戦時中に読み漁った書物によって、私は心の中には西域とか、沙漠とかいったものが、もうどうしても消すことのできないものとしてはいりこんでいたのである。(略)いつも私の瞼に浮かんでおり、そしてまたそこには、日本海の砂丘で仰いだ冷たい星の輝きが無数に置かれていたのである。私が思い描く沙漠の原形はいつも日本海の砂丘であった。

要するに、「楼蘭」という小説の成立は、井上靖が四高時代に、日本海で体験した砂丘のイメージの抽象化であったと思われる。井上靖は、昔読んだ書物を通して、シルクロードの文明の栄えと滅びの歴史がはっきり目の前に浮かんできただろう。周知の通り、井上靖は川に拘る作家である。嘗て「史実によって間違いなく書こうなんていうことはまるで違って、自分の持っている川をつかみだそうとする」（前出）と語ったが、「楼蘭」の場合には「自分の持っている川」、自らの〈白い河床〉体験に基づいて成立させている作品とも言えよう。

楼蘭が再発見されたのは約千五百年後の二〇世紀の初めである。井上靖は、ヘディンの『彷徨へる湖』が、ロブ湖が千五百年の周期で南北に移動するという推測を出したと理解している。おそらく楼蘭で生きた楼蘭の人々は、このようなロブ湖の習性を知らなかっただろう。ロブ湖を不変の存在として崇め、そしてこの地に国を作ったのだと考えられる。

しかし、ロブ湖は元々流されてきた土砂によって移動している「さまよえる湖」であった。作品には「楼蘭はロブ湖によって作られ、ロブ湖無しでは楼蘭とは言えない」（第二章）というようなことが書かれている。そもそも、歴史小説とは、過去の事物が時間的に変遷したありさまを記述することにある。その主体は極言すれば、結局破滅させられたものである。ゆえに、天災か人禍かの原因を問わず、ロブ湖無しでは存在できない楼蘭は、ロブ湖の習性から、元々滅びてしまう運命にあった国だったということが分かった。

三　「楼蘭」以外に見られる〈白い河床〉

井上靖のタクラマカン沙漠を舞台にした作品には「異域の人」（昭和二八年七月）「楼蘭」（昭和三三年七月）「洪水」（昭

和三五年七月）「狼災記」（昭和三六年八月）がある。「敦煌」（昭和三四年七月）は河西回廊を舞台にした小説である。井上靖自身は、タクラマカンの意味を「タクラマカンはウイグル語ではタッキリ・マカン。タッキリは〝死〟、マカンは〝広袤〟、つまりタクラマカン沙漠は死の沙漠ということになる。なかなか人間はその中に入って行くことはできぬ」[注15]や「死の沙漠」「不帰の沙漠」[注16]と説明している。

昭和六〇年八月、井上靖は「「楼蘭」新装版あとがき」に、「楼蘭」とその後に書いた一群の歴史小説とは「根本的に異なる発想の上に立っている」と言い、「この作品を支えているものは、楼蘭という往古の城廓都市に対する若い日の私の詩である」と自作を解説している。

井上靖の小説には、詩のモチーフを発展させたもの、また詩作品と同名のタイトルが多く、引き比べて読むと詩と小説の関係について一層興味深い発見がある。しかし、小説「楼蘭」に同名詩はない。

「楼蘭」とほぼ同時代の最初の詩集『北国』（昭和三三年三月三〇日、東京創元社刊、詩を三八篇収録）の後書きには、井上靖が小説家としてデビューする前の約二〇年間、五〇篇の詩を生み出したと書いている。欧米では小説家となる前に詩を書くのが一般的であるが、日本では希有な例だろう。この種の小説家としては、島崎藤村、室生犀星、伊藤桂一、清岡卓行などがいる。

ところで、『北国』には〈白い河床〉に関する詩「猟銃」（昭和二三年一〇月）を収録している。「猟銃」の末尾は次のように結ばれている。「そして人生の白い河床をのぞき見た中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺印するものは、やはりあの磨き光れる一個の猟銃をおいてはないかと思うのだ」とある。

遡って、井上靖の四高時代及び同人誌時代、雑誌『日本海詩人』『北冠』『焔』『聖餐』などに発表した詩作の中に、「ごく初期のものを除いて」、このような早期の詩作の大部分が、「流行作家の地位を築きあげた昭和三十三年になっ

て」から『北国』に収録されたという報告がある。(注17)

以下、井上靖の紀行文や散文詩から〈白い河床〉の原形に迫ってみる。まず、作家の生涯を通じて変色しない西域への憧憬について述べる。随筆「シルクロードへの夢」(前出)の一部分に次のようにある。

> 中央アジアで一番行ってみたいところはサマルカンドである。このいかなる記録や旅行記においても、美しいという形容詞を決して忘れることなく冠せられている砂漠の中の都邑に立ってみたいという思いは、若い頃も五〇になった今も変わりはない。単なる若い日の感傷とのみはいえないようである。この町はあらゆる民族に侵されている。アラブ人、カラキタイ人、回教徒、モンゴル人、ロシア人、いずれもこの都邑を栄えさせたり、惜し気もなく焼き捨てたりした。
>
> サマルカンドの古い城址に立ったら、何人の脳裡をも、さまざまな民族の栄枯盛衰が、それこそ走馬燈のように廻って来るであろう。

学生時代の井上靖は、シルクロードのロマンに満ちた世界の虜となった。「中央アジアへの夢は少年期というより、青年期に心にはいり込んで来た」(注18)と言う。青年になっても、彼はずっとシルクロードへの夢に浸っていた。「一番行ってみたいところはサマルカンド」とあるが、結局そこは、彼に対しては廃墟のイメージであり、沙漠諸国の「さまざまな民族の栄枯盛衰」の代表として強く印象に残されたのである。敦煌、楼蘭、高昌、バルフ、サマルカンドなどの、西域諸国の栄えと滅びの歴史的な宿命は、生涯にわたり彼の心を占めている。

井上靖は昭和五三年一月一日発行の『文藝春秋』から、昭和五六年一二月一日発行の同誌新年・特別号まで、計四二回に亘って「私の西域紀行」という紀行文を連載していた。その後、同文は昭和五八年一〇月二五日、上下二巻に分けて文藝春秋社から刊行された。また、翌年三月、第六詩集『乾河道』を刊行した。

詩集『乾河道』（昭和五一年一〇月二五日、集英社刊、七四篇詩作を収録）には古代文明の廃墟に関係がある詩作が多い。たとえば、「泉は涸れ、運河は乾上がった。いつのことか判らない。（略）永年経営の地は見るかげもない廃墟に化し、亡霊の棲家になっていた」（「精絶国の死」）。ほか「人生とは」「高昌故城」「バルフの遺跡にて」「ソバシ故城」「交脚弥勒」「河西回廊」「米蘭」「胡楊の死」などがある。

紀行文「河岸に立ちて」（昭和六一年二月、平凡社）と同様、紀行文「私の西域紀行」中にも、頻繁に「乾河道」「白い河床」という表現が出る。例えば、第二四章「亀茲国の故地」に、西域に時折出てくる白い「乾河道」に気づき、井上靖は天山から「まるでその塩が流れ出して来ているような感じ」であると書いている。同じ章で、ソバシ故城（井上靖によると、ソバシ即ち亀茲国のウイグル語であり、水源の意味である）の遺跡ソバシ河の川床について「堂々たる大河の荒れた姿である」と書いている。井上靖は、「ソバシ故城」（『乾河道』に収録）という詩の中で、廃れきったソバシ故城に入って階段を上ると、目にした墓室の中で誰か分からない「死者は今もなお眠っている」という。また、毎晩、月光が廃墟の隅々を照らしている光景を想像すると、「そう思った時ほど、歴史というものが、悠遠などといったものとは無関係に、ただひたすらに淋しいものに思われることはなかった」と感じている。

そして、「私の西域紀行」の第四〇章「ロブ沙漠をめぐる興亡」で、「乾上がった白いアルカリの地面」が月に当ると、「さぞ悽愴（せいそう）な眺めにある」だろうと想像している。このロブ沙漠一帯の、「沙漠の中のところどころに白いアルカリ地帯が置かれている」と書いている。詩人でもある井上靖は一本の乾河道を渡り、「現在は乾河道になっている」

チャルクリク河を見た。「楼蘭遺跡」も「ミーラン（米蘭）」も完全に廃れている。その時、「今日のチャルクリクの集落が往古の鄯善国の都であったとは判断できない」という、往古の都市の変貌の思いに浸るのである。

第六詩集の詩集名となった「乾河道」という表現は、最初に小説「漆胡樽」（昭和二五年）の中に出た。漆胡樽の最初の持ち主は楼蘭人の青年であった。「漆胡樽」は楼蘭が鄯善へ遷都する以前、国内では頻繁に河竜の怒りとされた旱魃が起り、環境悪化を背景に展開する物語である。

作者はまず、二章の冒頭で楼蘭付近の沙漠で起っている異変を描いた。「ロブ湖に注ぐ河流はことごとく断絶し」、嘗て満々たる水面の湖は今「一面の硬い塩の原と化した」と紹介している。城を巡っている何本かの河も今「僅かにその形骸のみを横たえている広い乾河道」となった。彼らの昨日まで住み着いていた地は、全くの廃墟として、沙漠に置き去られた。

井上靖は主に新疆、タクラマカン砂漠、ソ連の西トルキスタンのあたりを舞台にする西域小説を数多く創作している。「漆胡樽」に続いて、「楼蘭」（昭和三三年）「洪水」（昭和三四年）「聖者」（昭和四四年）などの作品の舞台はこの領域に点在している。それに、井上靖の「私の西域紀行」（昭和五八年）、「西域の山河」（昭和五八年）、「河岸に立ちて」（昭和六一年）、「異国の星」（昭和六二年）などの紀行文にも、古代文明の遺跡を巡って、自分の西域小説や詩のコメントや感想を書いている。それらの作品は、常に乾いた河の畔で三五の胡国が興亡を繰り返していたという共通のテーマを持っている。主に苛酷な自然の中に、広大な時間と空間のスケールの中に、西域によく見られる自然風景の乾河道を巡って、川の畔での国々の興廃栄枯、人間の営みを繰り返すことに注目して、作家は一連の作品群を創作している。そのような意味で、西域は井上靖の精神風土でもあり、乾河道系譜には、作者の人生観の一つが描かれていると思われる。

紀行文「アム・ダリヤの水溜まり」（『季刊芸術』昭和四四年四月、第九号）はロシアの川の話である。詳しく、レナ川、アムール川、アム・ダリヤ川、シル・ダリヤ川などの様子を記している。文末は、アム・ダリヤの落日の美しさで閉じられた。「ダリヤ」は、「海（転じて大河）」を意味するペルシア語のテュルク語読みになるので、「アム川」と表記する場合も見られる。井上靖は人間と川を象徴する自然との関係を次にようにまとめている。(注19)

沙漠の川というものは、どうも人類の運命を思わせるようなものではないようです。人間の生活とも運命とも無関係にこの川は流れている。その時々で流れる道を変え、それ自体の持つある法則に従って流れて行くという思いを懐かせられるからです。謂ってみれば沙漠の川は人類の運命を暗示させるようなものではなく、もっと直接に己が運命そのものの、どうにもできぬ表現であるように思われます。それ自体が己が運命の軌跡であるに他なりません。

井上靖は「運命というものに非常に興味を持ちます」(注20)と語った。しかし、ここで、むしろ運命そのものの巡り合わせ、宗教性の意味を離れて、偶然性というより、「沙漠の川」と「人間の運命」とが結びついている。もっと長い歴史からみると、気まぐれに自然環境が変わると、人間はいくら必死に努力しても、その興亡の必然であるということを強調している。川の流れの軌跡は、人類文明の軌跡であると思われる。「歴史を振り返ってみると、人間が運命をつくっている」と言われるが、実は川が人間の運命を司っている。これは乾河道系譜における最大のテーマであろう。

「楼蘭」も楼蘭国も、この乾河道系譜に位置づけられると考えられる。「楼蘭」の作者は、作品を通じて読者たちに「乾河道系譜」の作品のテーマを訴えているのである。第一詩集『北国』の中の詩「猟銃」に〈白い河床〉という表

現が既に使われていた。それは、作家の内部的な廃墟の原点となり、第六詩集『乾河道』にも通じてゆく。「楼蘭という往古の城廓都市に対する若い日の私の詩」（新装版「楼蘭」のあとがき）の原型は、詩「猟銃」であることを考えると、この小説も特に〈白い河床〉を基調に描かれた作品の一つであり、井上靖の人生観や宿命観により、成り立った作品であると言える。

おわりに

井上靖の西域小説の系列中で、特に「楼蘭」は大変重要な位置を占めている。西域は彼にとって学生時代から、生涯にわたり念願の土地だったのである。

井上靖が書いた西域物の中に、前記の「楼蘭」や「敦煌」や「異域の人」や「洪水」などの作品に、人が必死に努力して状況を改善しても、自然の力によって、全てが無に帰すことが書かれていた。現実的には、永遠には存在しない存在であるからこそ、すべては刹那的であっても、それは「歴史」なのである。「ソバシ故城」詩の中に、歴史というものはただ徒に淋しいものだという意味のことが書かれているが、井上靖は失われた世界の中で、永遠に続いている人間性の価値を求めるのである。

鶴田欣也氏は、小説「猟銃」における「白い河床」「白い月の光り」「白い薔薇」「白い小蛇」などの「白いイメージ」は、「死」「悲しみ」「孤独」などを象徴していると指摘している。[注21] 三杉穣介は一三年以来、不倫の恋を密かに胸に抱いている。彩子の死のため、「私」の目に映じているのは、三杉の「どこか落莫とした白い河床」を歩いている「現在の天涯孤独の身」となった彼の後姿である。「楼蘭」の中では、無限の砂漠における〈白い河床〉という表現が、

文明の死という運命を象徴している。しかし、「敦煌」では、人間としての強い意志、即ち努力を継続、持続していく意志を伝えている。初めて敦煌へ行った夜、井上靖は妻ふみさんに「俺は人類を信じるよ。それから芸術を信じるよ」[注22]と言い切った。彼は「楼蘭」を書き上げた翌年に、趙行徳という人物が沙漠の中で、敦煌文献や文化財を守ろうと努力している作品「敦煌」を完成させた。

井上靖は「乾河道系譜」の作品を通じて、人類の文明の栄えと滅びをテーマにする。この宿命を、作家は〈白い河床〉としてまとめたが、人類の大きな価値は、ひたすらに文明を営み、文明を構築することにあると信じるのである。この「乾河道系譜」の作品における宿命観とは、人類文明に対する否定ではなく、むしろ、すべての文明に対する肯定と賛美であると言えよう。人の営みの哀しさといとおしさを、作家は書き続けたのである。

作家はいつの時代、如何なる人物に素材を借りても、結局は自分を描くことしかできないのである。井上靖は、自分の生命をかけて、執筆活動を通じて、自らが楼蘭、敦煌、サマルカンド遺跡など、それらの失われた文明の軌跡を歩んできた。「楼蘭」という作品を通じて、文明・歴史に対する宿命観を、その独自の着眼点によって捉えようとした。避けて通れないキーワード〈白い河床〉に象徴される宿命観とは、井上靖の人生にとって不可欠のテーマであった。楼蘭という国も、また作家自身も、生涯にわたり〈白い河床〉を背負わなければならない宿命としてある。

注

（1）長谷川泉「現代文学における井上靖」（長谷川泉編『井上靖研究』昭和四九年四月一五日発行、南窓社）所収、二一頁。

（2）福田宏年『井上靖の世界』（昭和四七年九月四日第一刷発行、講談社）一九～二〇頁

（3）（注1）に同じ。小川和佑「詩と小説の接点」（長谷川泉編『井上靖研究』昭和四九年四月一五日発行、南窓社）所収、

三六〇～三六一頁。

（4）大岡信「井上靖における詩人」（高橋英夫・他著『群像日本の作家二〇　井上靖』平成三年三月発行、小学館）所収、五八六頁。

（5）「「楼蘭」新装版のあとがき」（『井上靖全集』別巻）一九九～二〇〇頁。

（6）井上靖・篠田一士・辻邦生『わが文学の軌跡』（昭和五二年四月二五日、中央公論社）一八八～一九八頁。

（7）守屋ひかる「井上靖考―初期作品における「白い河床」の造形―」（『国文橘』通巻二四巻、平成十年三月一〇日）参照。

（8）「シルクロードへの夢」（『井上靖全集』第二七巻）四四二～四四三頁。

（9）「二十四の小石」（『井上靖全集』別巻）一〇二頁。

（10）「洪水」と「楼蘭」の関係については、『井上靖研究』第一四号（平成二七年七月二〇日）掲載の、劉淙淙「井上靖「洪水」における自然への畏怖―典拠『水経注』との比較から」に述べた。

（11）「二つの歴史小説」（『井上靖全集』別巻）五二頁。『井上靖小説全集』第一六巻（昭和四八年二月）掲載の「自作解題」。

（12）「敦煌　砂に埋まった小説の舞台」（『井上靖全集』別巻）二三一頁。

（13）山本健吉『井上靖西域小説集』の「解説」（昭和五一年一二月一〇日、講談社）八三六頁。

（14）「西域紀行・砂丘と私」（『井上靖全集』第二七巻）四六八頁。

（15）「シルクロードの風と水と砂と」（『井上靖全集』第二七巻）五二七頁。

（16）「私の西域紀行」（『井上靖全集』第二八巻）五三頁。

（17）高木伸幸「井上靖初期散文詩論―「猟銃」の原点・〝昇華〟と〝浄化〟―」『近代文学試論』（平成七年一二月二五日、広島大学近代文学研究会）三七頁。

（18）（注8）に同じ。

(19)「アム・ダリヤの水溜まり」(『井上靖全集』第七巻)二三九～二四〇頁。

(20)(注6)に同じ。八六頁。

(21)鶴田欣也「井上文学における孤独と情熱」(長谷川泉編『井上靖研究』昭和四九年四月一五日発行、南窓社)所収、一二七頁。

(22)井上靖・平山郁夫対談『敦煌』(『歴史街道』「人間を信じるし、芸術を信じる」昭和六三年七月、PHP研究所)一七四頁。

〈付記〉

この論文における井上靖の本文の引用は『井上靖全集』第1巻(平成七年四月二〇日発行、新潮社)第5巻(平成七年九月一〇日発行、新潮社)第7巻(一九九五年一一月一〇日発行、新潮社)第27巻(平成九年一〇月一五日発行、新潮社)第28巻(平成九年一一月一〇日、新潮社)別巻(平成一三年四月二五日発行、新潮社)に拠った。

本稿は平成二四年度に皇學館大学に提出した修士論文の一部です。その後、平成二七年七月五日(日)の第八回皇學館大学人文学会大会での口頭発表資料に基づき、此の度、改めて加筆、修正を加えて成立したものです。貴重なご指摘を頂きました諸先生方に、この場を借りて御礼を申し上げます。なお、本稿に関する資料調査は三重県国際交流財団の奨学金に支えられています。

(りゅう　そうそう・皇學館大学大学院博士後期課程)